

Official trip report on ASEAN Design Selection 2017-18/Trade in Creative Industries

アセアンデザインセレクション 2017・18

出張報告書

国名と都市：ジャカルタ市、インドネシア

出張者： 上岡美智子貿易投資部プロジェクトマネージャー

リソースパーソン： 株式会社プレーン 代表取締役 渡辺弘明氏（審査員）

公益財団法人日本デザイン振興会（JDP） 事業部課長 津村真紀子氏

出張期間：2017年10月5日～8日

● 事業趣旨

「グッドデザイン賞」における「アセアンデザインセレクション」部門は、2003年に当センターと日本デザイン振興会（JDP）との共同事業で日本のビジネス界、消費者にアセアンの優れたデザイン商品を紹介する目的で発足した。当時、センターに未加盟だったミャンマーを除く9カ国のデザイン振興事業として、審査員を派遣し、審査と同時にセミナーを開催しアセアンの企業に対してデザイン意識改革及び商品改善にも貢献した。

その結果、2003年は初年度にもかかわらず、応募総数169件、受賞作品は43件（33社）であった。続く、2004年には44作品（33社）が受賞、2005年には58作品（48社）と合計145件の受賞作品を排出した。日本から派遣する審査員に加え、フィリピン、マレーシア、タイの審査員も審査に加わり、アセアンの審査員に対するキャパシティビルディングにも繋がった。JDPとの共同事業は2005年で終了したが、この事業の結果を受けて、2008年には、タイ国商業省DITPとJDPとの連携事業の覚書を締結し、タイ王国におけるグッドデザイン賞にあたるDEMark発足につながった。これを皮切りに、日本アセアンセンターは、JDPのアジアにおける連携事業拡大に貢献し、シンガポールにおけるグッドデザイン賞のSGMarkと相互協力覚書締結、さらにフィリピンにおけるPhilippine Design Awardの連携事業が実現した。

2003年事業当初から、質の高いプロダクトを多く生み出していたインドネシアのデザイン振興については、2017年にJDPとインドネシア商業省輸出振興局（DGNEED）との間で覚書締結に至った。こうした背景の中、今回当センターのアセアンデザインセレクション賞の選考とグッドデザインインドネシア選考を同時に行うこととなった。

● 訪問内容

今回は、2003年から、グッドデザイン・アセアンセレクションの連携を行ってきたインドネシアにおける、「Good Design Indonesia」締結事業、並びに選考作業と同時にアセアンデザインセレクション賞を選考実施。

10月6日：グッドデザインインドネシア並びにアセアンデザインセレクション賞選考

場所：インドネシア貿易省、会議室

審査員：インドネシア側審査員7名、日本より派遣審査員1名

主担当：Ms. Ganef Judawati, Director of Export Products
Development Directorate General of National
Export Development (DGNEED), Ministry of Trade

候補プロダクツ数：61プロダクツ

応募企業数： 46企業



第一次審査結果

合格：4 プロダクト、3 企業

ピラニワークス社 CV. Pirani Works

評価ポイント：プロダクト

インドネシア産の竹は工芸品に使用されることが多いが、今回は自転車に応用した点に注目した。ジョイント部分以外において竹材を使用することで、金属製造に必要な電力エネルギーのセーブにつながる。また、資源として豊富な竹を使用することで、第一次産業の安定供給に貢献できる。力が集中するジョイント部分を金属としており、構造上の問題も少なくデザイン性がすぐれている。今回はサイクル大、小の2商品とも選考対象とした。



プダック・オリエンタルインドネシア社 PT. Pudak Oriental Indonesia

評価ポイント：ビジネスモデルとプロダクト

プダック・オリエンタル社は、科学精密商品の製造会社であり、フレスコ、ピーカーを供給している。耐熱ガラスの品質を利用して、水出しサイフォンコーヒーを展開した、いわゆる商品のパラダイムシフトである。限られた専門分野の商品を一般に開放したアイデアに注目した。デザイン性もすぐれており、シンプルで余計な要素がまったくない。インドネシア製という意識もされることがなく、MUJI などの売り場でも即販売でき得る世界ブランドのポテンシャルを持っている商品。



IDE クレアシクルーニャ社 PT. IDE KreashiKurnia

評価ポイント：プロダクト

通称バタフライチェアと言われ、下部の形状が小さく上部にいくほど広がっていくもの。このような構造の椅子はバランスが悪くなることがあるが、この椅子は均整のとれたフォルムで、アンバランス性は見受けられない。この過程に至るまでは、相当な回数で試作を重ねたと思われる。また、インドネシアがラタンの資源国として世界一位であることから、自国の第一次産業の経済効果に貢献している。極細籐素材による編みこみ技術と太いらタンの素材との組合せ方も絶妙である。両羽根の部分が深く、体を包み込むような曲線になっており、座り心地の良さが際立つ良質商品である。



● 渡辺弘明審査員からの評価：

JDP からのグッドデザインインドネシアの第2次選考会の審査と同時に、日本アセアンセンターのアセアンデザインセレクション賞の第1次審査にあたるようにとの依頼を受けて、ジャカルタ入りをした。アセアンデザインセレクション賞は、日本人審査員による選考ということで、上記の通り評価した。インダストリアルデザイナーとしての目線から、竹製の自転車は大変優れており、日本での商品化を狙える位置にあると思う。

- 津村真紀子氏からのコメント：

2017年10月11日、インドネシア貿易省輸出振興局(DGNED)とデザインプロモーションにおける相互協力に関する覚書(MOU)を締結することとなり、それに先駆けた、日本アセアンセンターのアセアンデザインセレクション賞の選考と併せて審査員を派遣することとなった。10月6日、商業省においてそれぞれの受賞者の選考会議を行った。この結果、アセアンデザインセレクションについては、一次審査として3企業からなる4作品を渡辺審査員に選んでいただき、2018年の二次審査へと駒を進める。

- Good Design Indonesia について：

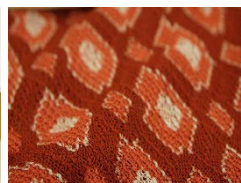
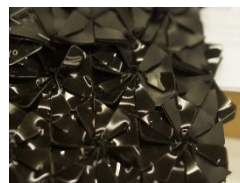
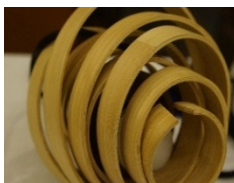
グッドデザインインドネシア賞については、2017年9月に、一次審査を終え、今回は二次審査を実施した。全作品61の中から15点が入選し、そのうち6作品がBest賞、1作品がGood Design Indonesia of the Year(ベストオブベスト)を受賞した。受賞作品は2018年に開催されるグッドデザイン展に出展される。さらに、受賞作品は10月11日から5日間開催された「Trade Expo Indonesia」の特設ブースにて展示され、開会に当り会場を訪れていたジョコ大統領も視察され、最優秀賞受賞作品である籐の椅子に腰掛けられた。10月11日にはH.E. Mr. Enggartiasto Lukita(エンガルティアスト・ルキタ)商業大臣の立会いのもとArlinda(アルリンダ)商業省貿易局長とJDP大井篤理事長によりDGNEDとJDPの間でのデザインプロモーションにおける相互協力に関する覚書(MOU)が執り行われた。その後大井理事長はDGNEDに対して挨拶し、2003年から日本アセアンセンターの協力により実施されたアセアンデザインセレクション事業に触れ、インドネシア独自の包括的デザイン賞であるGood Design Indonesiaの立上げにつながった功績を述べた。



左) 最優秀賞“Good Design Indonesia of the Year”を受賞したラタンの椅子に腰掛けるジョコウィ大統領 (Trade Expoにて)



右) ルキタ商業大臣、アルリンダ貿易省貿易局長と大井篤JDP理事長



グッドデザインインドネシアベスト6に選出された作品



最優秀賞 Good Design Indonesia of the Year 受賞作品

● 全体の総論：

グッドデザインインドネシアの選考とアセアンデザインセレクション賞の選考方法について、Ganef（ガニフ）貿易省貿易局部長と相談した結果、アセアンデザインセレクション賞に関しては渡辺審査員に一任することとなった。審査会のオープニングにあたって、Arlinda(アルリンダ)貿易省貿易局長は、今回の事業でインドネシア企業の対外輸出能力を促進に貢献できることを期待すると述べた。

グッドデザインインドネシアの選考に当たっては、インドネシア人の審査員による選考が行われ、国内向けの家電製品を含む15点が入選することとなったが、当センターの事業では対外輸出を考慮すべきという意見で一致し、着眼点を変更させて評価していただいた。竹製の自転車は、工業作品としては申し分ないところ、インドネシア国内販売許可を取得していないという理由で、入選には至らなかったが、機能性、デザイン性において輸出用のポテンシャルは高く、当センターの評価の対象となった。サイフォンコーヒーは、インドネシア製を意識することなく、グローバル市場に進出する可能性を持つ商品である。インドネシアのラタン家具製造会社は多数あり、珍しいものではない。しかしながら、現作品に至るまでに、試行錯誤を重ね相当数の試作品を作ったであろうという背景がみえてくる(渡辺審査員の評価)。インドネシアのものづくりにユーザビリティ配慮がみられ、他社との差別化、他国との国際競争力を確実に発展させているといえる。

